研究班紹介

1.『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究

ジョン・ボチャラリ（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の第一班の仕事を引き継ぎ、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻、第2巻の続編として第3巻を刊行した。

他の班の研究活動と比べ、いかにも地味な作業と見えるに違いない。日本語原文の『日本常民生活絵引』を翻訳しているだけではないか、と。しかし、地味な作業の中でそれなりの面白さと難しさが潜んでいる。

何年か前から「日本文化の発信」が課題に上がっている。どのようにして日本文化と歴史の面白さ、豊かさを日本語のできない方々に伝えるか。世界レベルの日本に関する言説の多くは英語などによるもので、日本人の「生の声」はなかなか伝わっていないように思う。日本中世への扉として『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』はきわめて面白い資料ではないであろうか。

だからといって、英訳するにあたって難しい問題がないわけではない。例えば、原文の中で現在の知識から見て納得できないところもあるが、気が付きながらも勝手に訂正するわけにもいかない。また、人物の名前などの英語表記も難しいところがある。日本語で読んだ場合では読み飛ばすかもしれないが、英語にした場合Sanahiraなのか、Masahiraなのかはっきりしなければならず、人名事典などを参考することにかなり時間がかかることになる。

それはともあれ、なるべく今期中に第4巻と第5巻を刊行するよう作業を続けているところである。

研究班紹介

2. 19世紀前期ヨーロッパ生活絵引研究

鳥越　輝昭（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

この共同研究の目的は、ヨーロッパの重要な諸都市について、19世紀前期における生活の様子を、非文字資料を中心に分析、比較検討して、絵引を作成することである。

都市としては、ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィアなどを取り上げる予定である。

19世紀前期という時代区分は、およそフランス革命から1870年頃までを指している。

使用する主な資料は、この時期に作成された絵画・版画のうち、都市の建築物、広場、街路、水辺、公園などを、そこに集まる人々とともに描き出している作品である。

この研究は、建築物や広場などの様子を、ヨーロッパ横断的に比較検討することにより、共通性と相違とを浮かび上がらせ、当時のヨーロッパの生活への洞察を深めるものとなるだろう。

共同研究のメンバーと専攻は、熊谷謙介（フランス文学・表象文化論）、小松原由理（美学、前衛芸術思想史）、ステファン・ブッヘンベルゲル（比較文学、ドイツ文学、ミステリー小説・漫画の研究）、鳥越輝昭（比較文学・比較文化史）である。熊谷がフランス語圏、小松原が北ドイツ語圏、ブッヘンベルゲルが南ドイツ語圏（含オーストリア）、鳥越がイタリア語圏と英語圏とを受け持つ。

この共同研究グループは、すでに18世紀ヨーロッパの都市生活について絵画・版画を資料とする研究を過去3年間おこなってきた。今回の研究はその実績と経験とに基づくものである。